

朱色のくつ

加藤文子

玄関を掃いている時、なんの気なしにくつ箱の戸を開けたら埃っばかった。せっかく見かけたので、きれいにしたくなる。

毎日玄関はそうじするのに、どうして隣り合わせのくつ箱まで気が及ばなかったのか不思議だ。くつ棚のジャリジャリをぬぐうのに、取り出たくつを玄関外のアプローチの鉄のスタンドに並べる。外に出したらよけいに汚れが気になった。普段履かないのは埃が被り、中に虫が入っていたり、カビたりしている。

これはいけない。この機会にくつも磨いておこう。

最初に手にしたのは、ECCO<sup>エコー</sup>というメーカーの朱色のくつ。埃にまみれ、発色も定かでない。父がミュンヘンで盆栽の講座をたのまれ、母と一緒に私も同行することになった。レセプションでも通用しそうな履きやすいくつが必要になって、あわてて購入したものだ。



どこへ行くのもスニーカーですんでいたもので、皮ぐつを買うのは久々だった。二十年以上も前のこと。

当時那須に引越したばかりで、どこに行けば条件に合うようなくつが手に入るのか見当がつかなかった。

黒磯駅周辺をうろろしていたら、裏道にようやく小さなくつ屋をみつけた。取り揃えは少なかったが、適当なのを買うことができた。履き心地良好、ずっと履いてきたような感じがした。

ミュンヘン到着から翌日、同地在住の旧友ハンスが会場のホテルまで会いに来てくれた。芭蕉をはじめ、山岳信仰、修験の世界やマタギなど、日本を独特の目線で紹介してきたジャーナリストである。

若い頃からたびたび日本を訪れ、取材を重ねている。滞在先のMさん宅と私の実家が近かった縁で知り合いになった。

そんな彼が講座が始まるまでのあいだ市内を案内してくれるという。ホテルから車を五分ほど走らせた先にあるオリンピック競技場を見学していたら、突然雨が激しく降り出した。

傘の持ち合わせがなかったので、みんなずぶ濡れになって近くのティーハウスに飛び込んだ。手入れの行き届いた植物に囲まれた、窓の大きな建物だった。

雨が厚いガラスをとめどもなく伝わり落ちる。雨水にコーティングされた窓から見る風景は、外界を遠くに感じさせた。紅茶で冷えきった体を温めながら、やむのを待った。父はおかまいなく日本語で話しかける。日本語のできないハンスは英語でこたえる。どちらもヘイチャラ。そのままずっと話している。どこでどう意味が通じていたのかわからなかったが、おもしろい話題には二人ともクツと笑う。オカシかった。遅い午後からはじまった父の講座には、ヨーロッパ各地から多くの盆栽愛好家が参加し、盛況に終わった。

父はいつもぶつつけ本番、原稿も用意しないでたくさん聴衆を前にしても上がることなく、内容豊かにはなしができる。終わった後もケロつとしていた。

小学生の頃から盆栽が大好きで、育てていたという。長年の友、盆栽のことだから、ひとりではなしが湧き出てくるのだろう。

eccoのくつは水たまりに何度も浸かり、皮の弾力も失って新品の装いからすっかりくたびれたものになった。

くつ下はくつの朱に染まり、夜のレセプションの時も濡れたままだった。

これが親子で行く最初で最後の海外になった。ジャングルの奥地までも、ひとり取材に赴いた野性児のような体力の持ち主のハンスも難病を発症し、数年前他界した。



春がくる <ウスキナズナ>

撮影：小沼寛

退色した朱色にクリームを塗って磨きをかけながら、雨の日のミュンヘンのことを思い出していた。  
くつ箱の中は光沢を取り戻したくつが並び、見ちがえるようになった。